

主 題：キリストは必ず再臨される 1

聖書箇所：ペテロの手紙第二 3章1-7節

Ⅱペテロ3：1は「愛する人たち。」ということばで始まっています。ペテロが読者である現在のトルコにある様々な教会の兄弟たち、クリスチャンたちを愛していたということは言うまでもありません。彼は主イエス・キリストから特別な命令を受けました。「わたしの羊を飼いなさい。」と。確かに、その命令を彼は忠実に果たしていたのです。場所は離れていても、この兄弟姉妹たちのことを彼はいつも心に留めていてこのメッセージを送ったのです。彼らのことを愛するゆえに、ペテロは彼らに警告と勧めを与え続けています。なぜなら、学んで来たように、教会の中にもせ教師たちが入り込んで来たからです。ペテロはこの手紙の2章の全部を使って彼らの本性と運命を明らかにしました。そして、彼らに警告を発したのです。このような人たちが教会の中にいるから、教会に入り込んで来るから気を付けなさいと。「どんな教えにも惑わされてはいけない。なぜなら、彼らは真実を語っていないから。しかも、彼らは永遠のさばきに向かっている。」ということばをペテロは明らかにしました。

そして、今日は3章から見ていきますが、ここでペテロは一人一人が惑わされないためにどうすればいいのか、惑わされないための対策、偽りの教えに惑わされないための対策を教えようとするのです。

☆にせ教師たちに惑わされないための対策

A. にせ教師たちへの備え 1-2節

1. 心を正しく保つ 1節

1節「愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。」「純真な心を奮い立たせるため」、これがペテロがこの手紙を記した目的であったと、そのことをこの1節が教えています。「この第二の手紙を」と今見ているこのペテロの第二の手紙のことですが、その後「これらの手紙により、」と単数でなく複数を使っています。ペテロ第一とペテロ第二の二つの手紙です。これらの手紙がこの目的をもって記されたということが、ペテロ自身のことばによって明らかです。

ペテロは教会のクリスチャンたちに何を望んだのか？それは彼らの「心を奮い立たせる」ことです。確かに、今から2000年前のメッセージです。でも、今の私たちにとってもこのメッセージは非常に大切です。というのは、その当時にせ教師たちがたくさんいて、偽りの教えを教え続けていたのですが、それは今も変わらないことだからです。様々な教えが聖書の教えだとされています。ですから、私たちも同じように、このペテロのレッスンをしっかり学んで自分自身をこのような間違った教えから守っていくことが大切です。ペテロは読者たちの心を奮い立たせようとした、それを目的としてこの手紙が記されたと、そのように言っています。

・「心を奮い立たせる」：すでに、私たちはこの「奮い立たせる」ということばを学びました。たとえば、1：13に「私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。」とあり、このことばは「目を覚まさせる、倒れたものを起こす、心を奮起させる」という意味を持っています。実際に、ヨハネ6：18では「潮は吹きまくる強風に荒れ始めた。」と「海を波立たせる」という意味でも使われています。ですから、ペテロはこのメッセージの初めに、危険が迫っていることを彼らに知らせるために、眠っている人たちがその眠りから目覚めてペテロと同じように危機感を共有するようにと、そのことを望んだのです。うっかりしていると間違った教えに惑わされてしまうから注意しなさいと言うのです。

でも、この手紙を見ると、ペテロが言いたかったことはそれだけではなかったということが明らかです。ペテロは、確かに読者たちのいる環境がこのような偽りの教師たちの惑わしの中にあることに気付いて、しっかり目覚めているようにと言いますが、それだけではないのです。

・「心」：「純真な心を」という「心」ということばを見ましょう。私たちは「心」とは一般的に「行動をコントロールするところ、私たちの考え、計画などをコントロールするところ」と捉えます。ギリシャ語では「カーディア」ということばです。ところが、この「心を奮い立たせる」という「心」は別のギリシャ語「ディアノイア」ということばが使われています。このことばの意味は「理性、考え方、理解力、知性(物事を考えたり理解したり判断する能力のこと)、知力」という意味をもったことば「ディアノイア」がここで使われています。新約聖書に12回出て来ます。その中の5回はことと同じように「心」と訳されていますが、1回は「知力」、3回は「知性」、2回は「思い」、1回は「理解力」と訳されています。

思い出してください。マタイ 22 : 36 - 37 「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」 : 37
そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』、
イエスが答えられた『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』の「心」
が「カーディア」です。そして、「知力」が「ディアノイア」で今私たちが見ていることばです。

ですから、ペテロは「行動をコントロールする心」というよりも「私たちの理性、私たちの知性」と
いうことを指してこのことばを使ったのです。

・「純真」 : この「心」の前に「純真」という形容詞が付いて「純真な心」となっています。「純真」
とは「虚偽のない、うそのない、悪い考えから離れている、悪、特に性的不道徳や異端の教えによって
汚れていない」という意味があります。確かに、ペテロはこの兄弟たちの心は汚れていないと言うので
す。なぜなら、彼らはイエス・キリストを信じる信仰によってその心はすでに神によって聖くされてい
たからです。イエス・キリストを信じた私たちも、私たちのこの心が聖くされたのです。私たちに新しい
心が与えられたのです。これが救いです。

ペテロがここで読者たちに伝えたかったことは「新しくされた心」のことではなく「新しい心がもた
らした新しい理性、新しい知性」です。心が新しくされたことによって、私たちクリスチャンひとり一
人は新しい知性、新しい理性をいただいた、つまり、神に喜ばれることが何かを判断しそれを実践する
ことが出来る、そのような人へ造り変えられたということです。私たちは新しい心をいただいているか
ら、その心によっていったい何が神の前に正しくて、何が神の前に喜ばれるものなのか？それをしっ
かり見極めることが出来る、その知性を私たちは神からいただいたのです。

私たちは日々いろいろなことを経験しますが、その中でいったいどのような応答が神に喜ばれるの
か？どういう態度でこの局面に接することが正しいのか、これらのことを判断できるように変わったと
いうことです。だから、パウロはこのように言いました。ローマ 12 : 2 「この世と調子を合わせてはいけ
ません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかを
わきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」と。このことは一般の人にはできないことです。

「わきまえ知る」ということばは「確認する、見分けることができる」という意味です。つまり、パウロ
がここで「あなたがたはいったい何が神の前に良いことであり、何が神に受け入れられることなのか、
何が神の前に正しいのか、いったい何が神のみこころなのか？それをしっかりと見極めなさい。」とその
ことを命じたのです。それは「あなたにはそのことができるから」と言います。救いに与ったあなたに
はそれが可能なのです。だから、パウロはエペソ 5 : 10 でも「そのためには、主に喜ばれることが何であ
るかを見分けなさい。」と言いました。もし、それができなければこのことを命じることはないでしょう。

神が「見分けなさい」と言われるのはそれが「できる」からです。ですから、ペテロがここで読者た
ちに教えたことは、感情的な覚醒ではなく（もちろん、それも少しは必要ですが）、それよりも理性的な
覚醒です。つまり、先にも言ったように、私たちは毎日の生活の中でいろいろな予期しない出来事に出
会うわけです。「なぜ、こんなことになったのだろう？なぜ、こんなことが起こったのか？」と、そのよ
うなことはたくさんあります。そういう局面において私たちは正しい理性をもって、主の前に正しい判
断をし正しい行動をすること、ペテロはそのことを願ったのです。それをここで教えるのです。

実は、ペテロは I ペテロ 4 : 2 にこのように記しています。「こうしてあなたがたは、地上に残された時を、
もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。」と。救われる前は私たち
は自分の欲望のままに生きていた。しかし、救いに与った私たちは、今度は神のみこころを求めそのみ
こころに従って生きて行く、そういう生き方ができるということです。でも、そのためには私たちは常
にいったい何が神の前に正しいことなのかを判断しなければなりません。ですから、ペテロが教えるの
はその「心」です。その「心」が目覚めていてどんなときでも正しい選択ができるようにと言うのです。

このことをペテロはこの 1 節で教えているのです。分かりますね。私たちも毎日の生活においていつ
もその選択の機会を神から与えられているのです。私たちが経験する一つ一つのことが私たちへのレッ
スンであって、その中にあって神が喜ばれることをしっかりと見極めてそれを選択するかどうか？忘れて
はならないのは、「その責任があなたにはある」ということです。なぜなら、私たちがそのように選択し
なければ、私たちが生かされている目的である「神の栄光を現すこと」ができないからです。神の栄光
を現すためには神のみこころに従う以外に方法はないのです。そのためには、いったい何が神のみこ
ころなのか？何が神に喜ばれることなのか？何が神の前に正しいことなのか？そのことをしっかりと吟味し
ながら、それを見極めて、正しい選択をすることです。まさに、ペテロが言わんとしたのはそのこと
です。そういう人としてあなたはしっかりとするようにと。

2. 心を正しく保つ方法 2 節

では、心を正しく保つにはどうすればいいのか？ペテロは彼らの純真な心を最善の方法をもって奮い
立たせようとしています。

1) みことばを学ぶ

1 節に「記憶を呼びまさせて、」とあります。「呼び覚まさせることによって」と前置詞はそのように訳せます。ここでいうことは「どうすれば私たちの心はそのようにいつも覚醒した状態にあるのか？」です。そのためにはあなたがもうすでに学んだ真理を「しっかり思い出すこと、それを忘れないこと」だと言います。記憶を呼び覚まさせることによってそれが可能になるのです。だから、ペテロは新しい真理を学ぶよりも、もうあなたが学んで来たその真理をしっかりと思い出しなさいと言うのです。

そして、彼らがしっかりと思い出すこと、忘れてはならないこととして2 節に「それは、聖なる預言者たちによって前もって語られたみことばと、あなたがたの使徒たちが語った、主であり救い主である方の命令とを思い起こさせるためなのです。」と書かれています。私たちの心がこのようにいつも正しい状態に保たれるためには、しっかりとみことばを学ぶことです。みことばから離れていて自分の心を正しく保ち続けることは不可能です。そこでペテロは「聖なる預言者たちによって前もって語られたみことばと、」と言いました。

「前もって語られた」と、この時制は完了形です。過去において語られたことです。これは旧約聖書のことを言っているのです。完了形は過去に起こったことの結果が今も継続していることです。だから、「聖なる預言者たち」は旧約の時代に神からのメッセージを語りました。そのメッセージは今も私たちのところに届いています。

しかも、「聖なる」といふことばが付いています。これを強調しているのは、確かに、彼らこそが神から遣わされた預言者であって、彼らは神のメッセージを語った者たちだからです。にせ預言者たちとは違うのです。その比較がされているのです。バプテスマのヨハネの父親であったザカリヤは神の約束＝男の子が生まれる＝を聞いたときに、信じることができませんでした。その結果、彼はことばが話せなくなりました。神の約束はこの生まれて来る男の子の名を「ヨハネ」と付けなさいでした。そんな名は自分の家系には一人もいませんでした。でも、男の子が生まれて人々が「どんな名にしますか？」と尋ねたときに、ザカリヤは「ヨハネ」と書きました。その時に彼の口は開いてことばが話せるようになり、彼は聖霊に満たされて神を誉め称えますが、このように言っています。ルカ 1 : 70 「古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。」と。今見ていることと全く同じです。ですから、この2 節でペテロが教えていることは「旧約の人」のことです。

2) みことばを忘れない

続いて、「あなたがたの使徒たちが語った、」とあります。12使徒たちが語ったメッセージです。彼らは何を語ったのか？「主であり救い主である方の命令とを」です。主の教えを受けてそれを語っていったのです。人々に伝えたのです。ですから、この後半の部分が何を指しているのか？新約聖書のことです。ペテロはこのように言って「あなたがたは神のみことばをしっかりと学ぶことが必要だ」と教えるのです。みことばの中に神のみこころが示されているからです。

ペテロは旧約聖書、新約聖書の様々な教えの中で、あることを特筆しています。それは「キリストの来臨」です。キリストがこの地上に帰って来るということです。そのことをペテロはここで敢えて取り上げて、にせ教師たちが教えていることがいかに真理でないかということをはっきりと明らかにするのです。この後も見ますが、にせ教師たちは「キリストの来臨」を否定していたのです。そこで、ペテロは「とんでもない。それは旧約の時代においても新約の時代においても神が語ったメッセージだから。」と言うのです。Ⅱペテロ 1 : 16 に「私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。」とあります。多くのクリスチャンに希望、力を与えたのはイエス・キリストの再臨の約束です。

新約聖書はマタイから黙示録まで全部で260章ありますが、その中で「イエス・キリストの再臨」についての言及は318回あります。新約聖書を書いた著者は9人です。9人ともすべてが「イエス・キリストの再臨」に言及しています。ですから、聖書を見ると、イエス・キリストが帰って来ることは明らかです。

ですから、あなた自身の心を守るためにはみことばをしっかりと学ぶことであり、そして、そのみことばを決して忘れないことです。2 節の最後に「…思い起こさせるためなのです。」と書かれています。実は、2 節は「思い起こさせる」という動詞で始まっています。このことばが文頭に来ているのです。つまり、これが強調されているのです。これが私たちがいろいろな誤った教えに惑わされないための「カギ」です。しっかりとみことばを思い起こしなさい。みことばを心に蓄えて忘れないで日々の生活をそれに生きなさいということです。

私たちの弱さは一生懸命みことばを聞いてノートを取ってもそれらを忘れてしまうことです。どれだけのことばを私たちは自分の心に刻んでいるでしょうか？あなたの心が正しくあり続けるため、あなたが神の前を正しく歩み続けて行くために必要なことは、あなたが聞いた神の真理を絶対に忘れないことです。神の真理があなたの日常生活に反映されていくためには、あなたは学んだその真理を常に反芻しな

がら繰り返し思い起こしながら、しっかり心に刻み続けていくことです。この点において私たちはみな神の前に悔い改めなければいけないのではないのでしょうか？聞いてはいるけれどすぐに忘れてしまう。

私たちの信仰の成長は神の真理を聞き、それを実践することによってできるのです。でも、聞いたことをすぐに忘れてしまう…、どのようにして信仰の成長を期待しますか？信仰の成長はどのようにして実践できるのか、どのようにすれば叶うのかということは聖書が教えています。私たちは何度も学んでいくことです。みことばを実践することなくして私たちは変わって来ないのです。ですから、ペテロはいろいろな間違った教えが入って来る、特に、主の再臨について間違った教えが入って来る、でも、その中であって常に、何が神に喜ばれるのかをしっかりと判断できるようになるのは、自分が学んで来た神の真理を忘れることなく、心に刻み続けておくことが必要だ、みことばを忘れるなどと言います。

そのときに私たちは初めてみことばに立った生き方が実践できるのです。ぜひ、ペテロが私たちに教えていることを心に刻んでください。それしかありません。そして、このメッセージは2000年前に語られましたが、今の私たちにも同じように大切なみことばです。ペテロが敢えてこのようなことを記したのは、繰り返しますが、この真理を惑わす偽りの教師たちがもうすでに教会の中に入り込んでいたからです。ですから、ペテロは彼らに対する警告と勧めを記しているのです。

B. にせ教師たちの存在 3-4節

3節から偽りの教師たちについての言及が始まります。3-4節「:3 まず第一に、次のことを覚えておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、:4 次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」、彼らは必ず教会の中に入り込んで来るということです。「あざける者たちがやって来てあざけり」とペテロは言います。様々な方法で人々に惑わしをもたらします。

1. 彼らの存在の確実性 3節

「まず第一に、次のことを覚えておきなさい。」

・**終わりの日** : これは主イエス・キリストの再臨のときです。そして、その再臨には「さばき」が伴います。その終わりの時、イエス・キリストがこの地上に帰って来られるとき、さばきがこの地上に下されるとき、そのときには何が起こるのか？「あざける者どもがやって来てあざけり、」と言います。ユダ18には「…「終わりの時には、自分の不敬虔な欲望のままにふるまう、あざける者どもが現れる。」とあります。同じことが言われています。

・**やって来る** : これは未来形です。でも、すでにこのような人が教会の中にいたということは私たちは知っています。つまり、今もいるし、これからもその人たちの存在は否定できないということです。このような人たちは常に現れるということです。約2000年経った今でもそのような人たちの存在を私たちは知っています。確かに、ペテロが言った通りです。

2. 彼らの働き 3-4節

彼らはどのような働きをするのか？三つのことをペテロは教えています。

1) ことばによる惑わし 3節

3節に「…あざけり」とあります。この人たちは神の真理をバカにし悪口を言う者たちです。「なぜ、そんなことを信じることができるのか？そんな馬鹿々々しいことをよく信じているな！」と。こういう人たちは今もいます。皆さんがイエスのことを話して、救いがあること、さばきがあることを言うと、多くの人たちはそれを歓迎しません。特に、皆さんと親しい関係にある人たちがそうでしょう。パウロはアテネで非常に優秀な学者たちに対してメッセージをしましたが、そのことを聞いた人たちはどのような態度を取ったのか？使徒の働き17:32「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。」、彼らは「嘲笑った」のです。冗談を言っているかのように思ったのです。パウロが言うことを全く信じない「馬鹿々々しい」と。そのような人たちは悲しいけれど今も私たちの周りにたくさんいるということです。

そういう人たちが登場するということは旧約聖書にも記されています。イザヤ5:18-19「:18 ああ。うそを綱として咎を引き寄せ、車の手綱できるように、罪を引き寄せている者たち。:19 彼らは言う。「彼のすることを早くせよ。急がせよ。それを見たいものだ。イスラエルの聖なる方のはかりごとが、近づけばよい。それを知りたいものだ」と。また、マラキ2:17にも「あなたがたは、あなたがたのことばで【主】を煩わした。しかし、あなたがたは言う。「どのようにして、私たちは煩わしたのか。」「悪を行う者もみな【主】の心になっっている。主は彼らを喜ばれる。さばきの神はどこにいるのか」とあなたがたは言っているのだ。」とすごいことを言っています。神に逆らう者が言うのです。「悪を行う者もみな【主】の心になっっている。主は彼らを喜ばれる。」と。さばきなどあるわけがない、なぜなら、神は喜んでいいるのだからと、このような信じられないことを言う者たちが出て来るということです。

このようになせ教師たち、ここにるように「あざける者たち」は自分たちが真理を信じないだけで

なく、人々のうちに信じさせないようにと働くのです。また、信じた者たちを何とか惑わして混乱させようとする。この人たちはことばによって惑わします。

2) 行いによる惑わし 3節

彼らはまた行いによって惑わします。私たちはもう2章で見てきましたが、3：3に「自分たちの欲望に従って生活し、」とあります。「…従って生活し、」と言いますが、これは「～に行く、旅を続ける」という意味で、つまり、この人たちは欲望に従い続けるという生活を送り続けているというのです。彼らの関心、彼らの選択は自分の欲望の欲するままに生きて行くことです。まさに、その旅を続けている、そのように歩いていくということです。

だから、この人たちは「自分の人生だから自分の好きなように生きていきたい。自分が楽しければそれでいいではないか。」と、そのような思いをもってそのような歩みをしている人たちです。教会の中に入って来て人々を惑わす人たち、神のさばきに服する人たち、彼らは自分たちの欲望に満ち溢れた好き勝手な生活をもって人々を惑わすのです。このようなことは2：2で見ました。「そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。」と。2：13でも同じようなことが記されていました。「彼らは不義の報いとして損害を受けるのです。彼らは昼のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。」

ですから、このように間違っただ偽りの教師たちが入って来て、自分たちの罪の生き方をもって人々が混乱するようにと働くのです。「なぜ、そうまでして聖書に忠実に従おうとするのか？好きに生きたいではないか！我々が生きているように罪のままに生きることは楽しいことだ。」と、まさに、そうして彼らは生き方をもって人々を惑わしたのです。なぜ、彼らはこのような生き方ができるのか？実は、その理由がこの後に書かれています。

3) 教えによる惑わし 4節

4節「次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」、この人たちはキリストの来臨が事実ではないと語っています。面白いことは、彼らの信仰の根拠が何か？です。4節にあるように「何も起こっていないではないか！創造の初めから何も起こっていないではないか！キリストの来臨の約束はどこにあるのか？先祖たちが眠ったときから（先祖たちとは旧約のイスラエルの勇者たちです）、彼らが眠ったときから何一つ変わっていないではないか…」と。彼らがこのように言ったということは、当然、彼らはクリスチャンたちが何を信じているのか—キリストが再臨するという—を彼らは聞いていたのです。

ところが、このあざけるにせ教師たちはそのことを聞いた上で、そのことをクリスチャンたちが信じているのを見た上で彼らはあざけるのです。「なんでそんな馬鹿げたことを信じているのか？なぜそんなことを信じられるのか？今までの歴史を見ても何も変わっていないではないか！」と、そうして彼らは信者たちを侮ったのです。みことばをいくつか見ましょう。

使徒3：13「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの父祖たちの神は、そのしもペイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。」

ローマ9：5「父祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。」

ヘブル1：1「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、」

C. にせ教師たちの過ち 5 a 節

5節の初めにこの人たちの間違いが書かれています。「こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。」と。実は「見落としています。」は面白いことばを使っています。このことばは彼らが「意図的に真理から目を背ける」という意味です。ペテロがここで言っているのは「こんなことを言っている彼らは次のことを見落としている。」と、つまり、このことを知らないのではなく、ここで使われていることばによれば「彼らはクリスチャンたちが信じていることを聞いたし、旧約聖書を使って神のメッセージを明らかにしてこのように神が約束していること、必ず再臨がある、必ずさばきが来るということを聞いたにも拘わらず、彼らはそれを見落とした、すなわち、自分の意志でそのメッセージに、真理に背を向けた」と、そのように言っているのです。この箇所が教えていることは、なぜ、この人たちは真理を聞いても信じないのか？信じる代わりにどうしてこうして真理を信じる者たちをあざけるのか？それは彼らが真理を信じたくないからだということです。

そんな人たちばかりです。かつての私たちもそうでした。キリストの福音を聞いても私たちの多くの者はそれがそんなにすばらしいとは思えませんでした。自分はその救いをいただく必要があるとは思わ

なかった。そうではありませんか？このあざける者たち、このにせ教師たち、真理に逆らう者たち、なぜ、彼らは真理に逆らうのでしょうか？それが彼らがしたいことだからです。なぜ、彼らは神に従わないで自分たちの快樂のままに生きて行こうとするのでしょうか？それが彼らのしたいことだからです。結局、そこに問題があるのです。信じたくないから信じないのです。だれかのせいではない、その人の責任です。神の真理を聞いていながらそれに対して心を開こうとしないのです。心を閉ざしてしまって「私はそんなことは信じたくない」と言って信じないのです。ペテロはそのことを明らかにしました。

D. さばきの確実性 5b-7節

このような者たちには必ずさばきがあるということです。続きをご覧ください。5b-7節「すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによって水から出て、水によって成ったのであって、：6 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。：7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」、ペテロは「何も変わっていない、さばきなどない！」と言い張る彼らに対して「さばきはある。これは現実だ。」ということをお教えますが、二つの面からそのことを証明しようとしています。

1. 歴史から

歴史からそれを証明しようとしています。ペテロがここで言う出来事は「ノアの洪水」です。ノアの時代には「天は古い昔からあり、」ともう存在していたと言います。天は洪水が起こるはるか前にもう神によって創造されていたと。この地は「地は神のことばによって水から出て、水によって成った」とあります。創世記にはそのことが書かれています。1：9-10「：9 神は仰せられた。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所が現れよ。」そのようになった。：10 神はかわいた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを見て良しとされた。」と。ペテロが教えるように、この地は神のことばによって水から出て来ました。水に覆われていたところからかわいた所が現れたのです。

「水によって成った」と、つまり、ペテロはここで神は水を使ってこの地の起伏や風景、湖や海岸線、峡谷など、それらを造られたと言います。今でも私たちは耳にします、「水の浸食によって」と。こうしてペテロは水によってこの地はできたと言うのです。そして、その同じ水によって6節「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。」と書かれています。ノアの時代はこうして滅びたのです。こうして歴史的事実を明らかにするのです。詩篇136：6には「地を水の上に敷かれた方に。その恵みはとこしえまで。」と書かれています。

2. 約束から

その上で、7節の初めに「しかし、」という接続詞が続きます。神の約束からさばきを証明するのです。「しかし、今の天と地は、同じみことばによって、」と、ペテロが言いたかったのは、このノアの洪水のさばきを教える聖書のみことばです。なぜなら、2000年前、だれ一人としてノアの洪水を経験していないからです。どうして彼らはそれを知ったのか？今の私たちと同じように、旧約聖書を通してです。ですから、ペテロはそのことを言ったのです。「今の天と地は、同じみことばによって、」、こういう約束のもとにこのような結果を招くということです。何があるのか？さばきが来るということです。しかも、7節に続いて「…火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」とあり、さばきについて二つのことが記されています。

1) どのようなさばきが来るのか : 火によるさばき

「…火に焼かれるためにとっておかれ、」と、次のさばきは水によるものではありません。洪水が終わった後、神は虹を造って「もう洪水によって人類を滅ぼすことはない」と言われました。だからと言って、さばきが来ないのではなく、次のさばきは「火によるさばき」です。次のみことばがそのことを教えています。イザヤ66：15-16「15 見よ。まことに、【主】は火の中を進んで来られる。その戦車はつむじ風のようなだ。その怒りを激しく燃やし、火の炎をもって責めたてる。：16 実に、【主】は火をもってさばき、その剣ですべての肉なる者をさばく。【主】に刺し殺される者は多い。」、Ⅱテサロニケ1：7「苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。」、ヘブル12：29「私たちの神は焼き尽くす火です。」、詩篇50：3「われらの神は来て、黙ってはおられない。御前には食い尽くす火があり、その回りには激しいあらしがある。」

2) だれがその対象か : 不敬虔な者ども

このさばきの対象はいったいだれか？「不敬虔な者どものさばきと…」とあります。「不敬虔な者」とは「不信心な者」です。神でないものを神として崇めている者たちです。また、神よりも自分の快樂を愛している者たちです。見て来たとおりで。また、神を恐れぬ者たちです。神の約束を聞いても、神の警告を聞いても恐れようとしません。このような人々に対して、神は必ず火によるさばきがかかることを約束しています。みことばを見てください。

ローマ 1 : 21 - 25 「:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。:24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」

Ⅱ テモテ 3 : 4 「裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、」

ユダ 15 「すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。」

7節には続いて「さばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」とあります。「滅びの日」とは何のことか？新約聖書の神学辞典で調べると、このことばにはこういう意味があるとのことのような解説をしています。「これはただ単に存在が消滅するというのではなくて、苦しみと死の永遠の状態である。」と。ここですべてが終わって消えて無くなってしまおうということではありません。さばかれた後、その人は永遠の苦しみを経験するということです。それがこの「滅び」ということばが持っている意味です。

ですから、皆さんもご存じのように、神に逆らう者たちは必ず神の前でさばきを受けて、その罪が明らかにされて、その結果、彼らは永遠の滅び、永遠の地獄へと行きます。そこから逃れることはできないのです。昼も夜も永遠に苦しみ続けていく、まさにペテロはここで、「火によるさばき」があり、その後、その人たちは永遠の苦しみに至ると、そのように言っているのです。

7節の最後でペテロはこうして「にせ教師たち、あざける者たち」に対しての警告をまた記しました。このようなことが彼らには約束されていると。なぜ、ペテロはここでまたこのことを記したのか？一つ言えることは、ペテロは教会に入り込んで来たこのにせ教師たちに対しても救いの機会を与えようとするのです。どんな罪人であっても、神の前に罪を悔い改めて救い主イエス・キリストを信じるなら、その信仰によって罪が赦されます。これまでこうしてにせ教師として真理でないことを教えて来た彼らでも、神の前にその罪を悔い改めて救いを求めるなら救われるのです。恐らく、この手紙を受け取った読者たちは、このメッセージを彼らに語ったかもしれない、教会の中でこのメッセージが読まれたでしょう。教会の中にいる「にせ教師たち、あざける者たち」はこのメッセージを聞いてどう思ったのか？

でも、少なくとも、ペテロはこうして最後まで救いのメッセージを語り続けたのです。それが私たちの務めではありませんか？皆さん。私たちひとり一人、神のことばをしっかりと心に刻んで忘れることなく、しっかりとそれに立つことです。どんな時でも神の前に正しい喜ばれる選択が何かを考えて、そのように生きて行くことです。そのためにはみことばがしっかりと心の中に刻まれていなければいけません。いつもそれを反芻しながら、自分の中からそれが消えてなくならないようにするのです。そうして、私たちは兄弟姉妹を励ましながらかのように歩むことができます。

同時に、私たちの周りにいる神に背を向けている多くの人たちに対して、まだ、救いを語り続けていくのです。私たちが天に上がるその日まで…。私たちが天に上がった後、地上に残っている者たちがいるでしょう。もし、再臨がもう少し先であれば…。その人たちが天に上がった者たちのことをどのように言うでしょう？どのように言われたいですか？「いい人だった」とか「頑固だった」とか、いろんなことを言うでしょう。でも、こう思いませんか？「私の父親は、私の母親は、私の祖父は、私の祖母は、最後の最後までイエス・キリストによる救いを語り続けた。祈り続け、救いのメッセージを語り続けた。」と。そのようにしてこの地上での歩みを終わりたくありませんか？私はそのように終わりたいと思います。ペテロは最後までこうしてこの人たちに福音のメッセージを示し、警告を与え続け、悔い改めの機会を与え続けました。

そのような務めをいただいている私たち、この一週間、この務めをしっかりと果たしていきましょう。みことばをしっかりと心に刻んで、正しい選択をもって、救いを宣べ伝えて行く、それが私たちの歩みです。そのように歩いていきましょう。

《考えましょう》

1. 「心を奮い立たせる」とはどういう意味かを説明してください。
2. 「記憶を呼び覚まさせる」ことがどうして大切なのかを説明してください。また、「記憶を呼び覚まさせる」ためにはどうすれば良いとあなたは思いますか？
3. 神によって保たれている「さばき」について教えてください。
4. あなたが教えられたことを信仰の友と分かち合って実践に励んでください。